

---

## 原 著 論 文

---

# カタルーニャの人間の塔における身体、感情、つながり<sup>(1)</sup>

Martí, Josep<sup>1</sup>

(翻訳者：竹中 宏子<sup>2</sup>)

## Bodies, Emotion and Sociability in Catalan Human Towers.

Martí, Josep<sup>1</sup>

(Translated by Hiroko Takenaka<sup>2</sup>)

(<sup>1</sup>Departament d'Arqueologia i Antropologia, Institució Milà i Fontanals (CSIC)

<sup>2</sup>Faculty of Human Sciences, Waseda University)

(Received : November 18, 2019 ; Accepted : January 30, 2020)

### Abstract

The castells are a cultural manifestation with a great symbolic relevance for Catalonia. Since 2010, they have belonged to the Intangible World Heritage by UNESCO. Spread throughout the whole country, the name castell refers to building human towers that can reach a considerable height and are characteristic for festive events. These human towers can achieve heights of up to ten levels. Erecting human towers of such dimensions is not an easy matter and requires a certain sophisticated technique. According to their practitioners, the key words that define the castells are força, equilibri, valor and seny (strength, balance, courage and sense). These cultural manifestations come to life through the action and interaction of different territories of sociability that very often are constituted by specialists, tradition bearers, the imagined community, institutions and even scholars. In the course of time, especially in the last 50 years, these territories of sociability have undergone relevant changes.

The castells groups are made up of both women and men from all layers of the social stratum. In their performances, there are many different elements involved, human bodies, the space's materiality, the audience, music and other sonic elements, varied sensuous stimuli and a constant flux of affects, feelings and emotions. All this allows us to consider the performances, in which these human towers are erected as assemblages, as ad hoc groupings of diverse elements, of vibrant materials of all sorts, in which elements are correlated in a non-rigidified manner and the boundaries of which are constantly fluctuating.

The individuals who make up the towers experience moments of contact that are different from the somatic order codes of everyday life. Through the close physical contact, the unity of action and the constant flow of emotions, bodies lose their individuality and easily become one single collective body.

**Key Words :** *Castellers*, body, emotion, tradition, Catalonia.

---

<sup>1</sup> 国立高等科学研究所ミラ・イ・フォンタナルス／考古学・人類学系

<sup>2</sup> 早稲田大学人間科学学術院 (*Faculty of Human Sciences, Waseda University*)

## 1. はじめに

### 1.1. 人間の塔という伝統

いかなる社会でも、それを象徴するような固有の「伝統文化」と呼ばれる文化的行事を有している。それは、集团的アイデンティティを代表する価値をもつようになる。「人間の塔 (castells)」はカタルーニャにとって、こうした文化的行事の一つとしてつくられたものである。特に近年、国際的に一定の認知度を獲得し、2010年にはUNESCOの世界無形文化遺産に登録された。「人間の塔」の原語Castellという言葉は、文字通りには「城」を意味するが、かなりの高さに至る人間によって構成される塔のことを意味し、それを実際につくるメンバーのことはcastellersと称される。

人間の塔は、通常、18世紀終わり頃のカタルーニャ南部で始まったことを起源とする伝統<sup>(2)</sup>で、「バレンシア人の踊り (ball de valencians)」の一部から派生したものと考えられている。この踊りは、17世紀終わりのタラゴナでその存在が確認されており、当時の踊り手たちもピラミッドや低い塔を建てていたようである。バレンシア人の踊りは、重要な祭りであった聖体の祝日 (Corpus Christi) 【訳注1：カトリック教会典礼に基づく、復活祭の復活日から60日後の祝日。聖体を崇め、祝う儀礼が教会を中心に行われる】で上演されるなど、儀礼・祝祭的な機能を担っていた。この踊りから派生したと言われる人間の塔も、祭りに関係する要素の一つとして理解されていた。

19世紀を通じて人間の塔は、バルバラ (盆地) (Conca de Barberà)、パナデス (Penedès)、ガラフ (Garraf) といったタラゴナ地域 (Camp de Tarragona) 内のいくつかのコマルカ (comarca) 【訳注2：地域区分の一つで、役所が設けられる市町村をいくつか集めた地域を指す】から広がったのだと考えられている。19世紀後半にはその人気はかなり上昇し、バルセロナ地域にもチーム (colles<sup>(3)</sup>) がつくられた (Bertran, 2011, p. 39)。人気低迷の時期を経て20世紀初頭には、タラゴナ地域に位置するバイス (Valls) という町にのみ人間の塔を立てるグループが残ったとされるが (Bargalló, 2001, pp. 21-23)、1920年代以降はその活動が徐々に広がり、復活の兆しが見え始めた。1960年代に人間の塔の活

動は、その伝統的な地域の限界を超えてカタルーニャ全土に広がりを見せ (Bertran, 2011, p. 40)、1980年代には多くのチームがそここに誕生した (Bargalló, 2001, p. 50)。人間の塔の実演は、1987年には415回、60チームの存在が確認された1999年には1347回行われた (Bargalló, 2001, p. 52)。それ以降2000年代に入るまで、技術的な観点から人間の塔は、高さや構造の完成度を向上させてきた。そして2018年には、カタルーニャには98の人間の塔チーム<sup>(4)</sup>が存在している (表1)。

表1：チーム数の変遷 (1910～2018年)

年	チーム数	伝統的な地域のチーム数	新しい地域のチーム数
1910	2	2	-
1936	6	6	-
1939	3	3	-
1960	8	7	1
1980	17	12	5
1996	51	22	37
2000	58	20	38
2018 <sup>(6)</sup>	98	21	77

(出典：Bargalló, 2001: 89)

人で構成される塔がCastellsと呼ばれるには、最低でも6段なければならない。最も難しい塔には特別に「ハイレベル」(gama alta) と分類されるが、それは8段～9段の塔で、最近では10段の塔も建てられるようになった。このようなレベルに分類される人間の塔を建てるのが困難で、ある一定の技術を要することは想像に難しくないだろう。しかしながら、その技術の現在に至るまでの洗練化が、それまで全く不可能であった高さの人間の塔を建てることを可能にしているのである。

多数の人間が凝縮された塊のようにになっている最下層なしに人間の塔を建てることは不可能であろう。より高い大きな塔には、より大きな最下層が必要となる。この最下層は、「ピーニャ (pinya)」あるいは「ソカ (soca)」【訳注3：最下層の上に後述するフォーラやマニージャスに乗ると、その最下層はソカと呼ばれる】と呼ばれる。ハイレベルに分類される塔を立てるには、300～400人、あるいはもっと多くの人から成る最下層が必要となる<sup>(5)</sup>。ピーニャの機能は、塔の土台となることであるが、同時に、塔が崩れた場合にメンバーのクッションとなるためでもある。塔は、柱あるいは「幹」の部分(tronc)

に加え、最上段の3段を構成し、常に体重が軽いという理由で子供が抜擢される最上層 (pom de dalt) によってもつくられている。「塔に王冠を載せる」、すなわち塔の完成を告げる子供は「アンチャネータ (enxaneta)」と呼ばれている。一つの塔が完成とみなされるために、塔は建てられるだけでなく、慎重に崩すことが必要不可欠となる。この伝統を実践する人々によると、キータームは「強さ (forza)」、「バランス (equilibri)」、「勇気 (valor)」、「知恵あるいは共通意識 (seny)」<sup>(7)</sup> である。

人間の塔は、人間の塔グループを有する市町村の守護聖人祭で必ず現れる。伝統的には、人間の塔のシーズンは、聖フワンの日 (6月24日) から聖女ウルセラの日 (10月21日) までである。しかしこの数十年間で、人間の塔の実演は、伝統的な祭りの暦から離れていき (Bargalló, 2001, p. 10)、今では年間を通じて常に行われている。塔は、慣習的に当該市町村にとって象徴的に重要な空間で建てられ、特に市庁舎や重要な教会が位置する中央広場 (plaça major) で催されることが多い。

しかし、こういった実演に加えて、人間の塔の活動の中で重要なのは、異なるグループが競技を行うコンクールで、そこではよりレベルの高い塔を完成させたチームに賞が与えられる。整えられたルールの下で行われた史上初のコンクールは、1902年バルセロナで実施された (Bertran, 2011, p. 40)。しかし、この慣習は通常、1932年以降のこととされる。つまり、1932年にタラゴナで行われたコンクール以降、競技としての人間の塔が確立したと言える (Bargalló, 2001, p. 27)。

人間の塔メンバーの特徴的な服装は、1900年～1930年頃に徐々に作り上げられてきた (Blasi, 1997, p. 19)。人間の塔チームは全て、服装に関する統一された規定に従っていて、塔をつくるメンバーは皆、シャツと白いバギーパンツに加えて、体重を支えるための腰巻と主に頭や腕に巻くスカーフを身に着けている。人間の塔メンバーは実演の前に腰巻を巻くが、これは今日、ある種の儀礼的なものとして捉えられている。チーム同士は、服装の一部であるシャツの色によって互いを差異化している。一人の少女が亡くなったことを機に、2006年から塔の最上層に上る子供たちには防御ヘルメットの着用が義務付けられている。最近では、ヘルメットに加えて

マウスピースといった防御策が導入されている<sup>(8)</sup>。

## 1.2. 「スポーツか見世物か」の議論について

人間の塔の世界では、人間の塔が見世物なのか／スポーツなのかについての議論が度々浮上するが、明らかに両方の要素を持ち合わせていると言える。身体を動かす一定の技術が要求される運動が含まれ、ルールという枠組みもあり、また、コンクールという競技も用意されていることから、人間の塔はスポーツと見なせるだろう。しかし、スポーツ一般に言えるように、人間の塔はそれ自体で見世物ともなり得る。観衆は人間の塔が建てられ、その後崩されるのを見て楽しみ、同時に、建て始めてから塔が建つまでのプロセスと、建った瞬間の感動を共有する。この感動は、常に塔に「冠が載る」(塔が建つ)わけではなく、時に劇的な形で崩れ落ちる可能性が常に想定されていることに起因する。

どんな見世物であっても、観衆は絶対不可欠な要素であり、このことは人間の塔にとっても同じである。しかしながら、多くの場合、人間の塔の用語で「広場」(la plaça) と呼ばれる観衆の役割は単なる「観衆」ではなく、塔を支える最下層のピーニャの一部となって、塔づくりの一助となる。ここで、非常に高い塔には最下層をつくる人々が何百人と必要であることを思い出してほしい。必要とあらば、観衆の中からピーニャの役割を担う人をその場で選んで連れてくるのだ。たとえ実演を行う人間の塔チームが、実演される市町村に属していなくても、最下層をつくるのに協力してくれる誰かを見つけるのは難しいことではない。誰でもできるし、拒否する者もない。これは、他の伝統文化の実演と異なる点で、その地理的範囲の外で行われる時には通常、起こり得ないことなのである。

## 2. 人間の塔と「つながりのテリトリー」

人間の塔を含めたあらゆるタイプの文化的行事にアプローチするときに良い方法は、彼らがもつ様々な「つながりのテリトリー」(territorios de sociabilidad) 【訳注3：ここで言う「テリトリー」はG.ドゥルーズが提唱する「脱領土化」「再領土化」からインスパイヤーされている。人を中心としながらも、その他の物事や考え、物理的な空間なども含

めた有機的な連関を指す】を通して考察することである。こうしたテリトリーにおいて、人間の塔が組み立てられ、塔が実際に建ち、そしてその複雑なプロセス全てが明らかになるのである。捉えるべき主な「つながりのテリトリー」は、次の5つである。

- 1) 伝統を積極的に担う主体
- 2) 伝統を担うコミュニティ
- 3) 伝統を基礎にする「想像の共同体」
- 4) 伝統を可視化する、または伝統を支援する(公共)団体
- 5) 伝統の研究者

## 2.1. 伝統を積極的に担う主体

最初に考慮すべきつながりのテリトリーは、伝統を積極的に担う主体、つまり、人間の塔をつくるために集まった人々のことである。現在カタルーニャには、人間の塔のチームが100ほど存在し、1チーム100人から500人ぐらいの人々が所属している。チームにはあらゆる年齢層の人々がいる(例えば子供たち。塔の最上部をつくることで、子どもたちが重要な役を担っていることを思い出してほしい)。1960年代までこうしたチームは、農村地域の労働者階級の男性たちが構成員だった。女性が参入可能になった1980年代以降<sup>(9)</sup>、現在まで、男性も女性も階層も関係なくチームの成員となっている<sup>(10)</sup>。1970年代までは、塔を建てる際に出演料をとっていたので、人間の塔チームはある種のプロフェッショナル集団と言われていた(Bertran, 2011, p. 42)。現在では、稼げるからではなく、実演することそのものに価値があると考えられている。

カタルーニャの文化遺産の維持に協力するという意識に加えて、人間の塔チームのメンバーは、実演するときに楽しみを見出し、チームのみんなで感動を共有でき、非常に充実した社会生活を送ることができるのである。つまり、彼らの活動は公の場での実演のみではない。普段の練習も重要な活動なのである。規模の大きなチームは、練習に相応しい設備が整った練習場をもっていて、それは独自のものであることもあれば、地方自治体から与えられた場合もある。

このように人間の塔チームは、世代を超えた社会生活を提供していると言える。また、様々な社会階層が混在していることから、移民にとっては社会統合の資源としても見なされている(Bertran, 2011, p. 45)。

これまで述べてきたことは、集団としてのアイデンティティ意識を創出することにつながる。それは、独自色のユニフォームを介して、あるいは実演には必ず付随する曲の演奏の仕方の中に刻印された集団的アイデンティティなのである。

## 2.2. 伝統を担うコミュニティ

伝統が文化的に表現される場において、実演する人々を中心とした、その外側に、通常、その伝統にアイデンティティを感じる集団が見られる。人間の塔の例では、チームの本拠地となる市町村がそれである。一般的に人間の塔のチームには、Bordegassos de Vilanova(町名は、Vilanova)、Colla Jove Xiquets de Tarragona(町名は、Tarragona)、Capgrossos de Mataró(町名は、Mataró)、Castellers de Barcelona(町名は、Barcelona)、Xics de Granollers(町名は、Granollers)のように地元の市町村、あるいは大きな都市の場合、Castellers de Sants、Castellers del Poble Secのように(この2チームが属するバルセロナの)街区の名前がつけられている。人間の塔の伝統が長く続いている町においては複数のチームが存在しているが、町の名称がつけられないことは絶対でない。例えばバイス(Valls)という町の場合、人間の塔チームは2つ存在するが、それぞれColla Vella dels Xiquets de Valls, Colla Joves Xiquets de Vallsであり、町名が付けられていることがわかる。

祭り、宗教行列、人間の塔のような無形文化遺産が執り行われる場合、集団的な「つながりのテリトリー」においてその土地固有の伝統を実演することは、そこで行われている出来事にたまたま居合わせた証人である観光客のような外部からの観察者では到底感じ取れない感動の生成を意味する。人間の塔メンバーにも、サッカーのようなスポーツチームと同じように、地元チームを応援するという現象が見られる。町であっても都市であっても、その土地に集団的なアイデンティティを感じる可能性はあり、自分たちの町の人間の塔チームの成功は喜ばれ、倒壊には嘆くのである。

## 2.3. 伝統を基礎にする「想像の共同体」

無形文化遺産を介した自己投影は、前述の2つの



つながりのテリトリーに限られず、その社会的な範囲が広げられることもある。仮に文化的な表現を「日本の」「ドイツの」「カタルーニャの」などの形容詞で表現するなら、それは、文化的行事を、つながりが生み出す「想像の共同体」(Anderson, 1983)の中で理解しているからに他ならない。これらのつながりのテリトリーは、その想像された国や共同体にとっての「代表的な文化」という地位を獲得する限りにおいて、該当する文化的行事に新しい意味と使用価値を与えることができる (Martí, 1996, pp. 33-36)。こうした無形文化遺産という表現は、当初、地域的な価値しかなかった。しかし、想像の共同体というテリトリーを形成するにしたがって、それはより広い「地方」、または「ナショナル」な価値をもつようになった。

1992年のバルセロナオリンピックの開会式で人間の塔が披露されたが、人間の塔がまさに、カタルーニャという想像の共同体の代表とみなされていたからだ。人間の塔は、制度的な文脈や権利主張という文脈、あるいは観光という文脈において、カタルーニャ性を表現するための象徴的な資源となる。最近、人間の塔チームがカタルーニャの独立を巡る政治的な出来事に深く関わりあっていることは、よく知られているだろう。カタルーニャ独立を求める多くのデモや、2017年11月に失敗に終わった独立宣言の後に拘留あるいは亡命を余儀なくされた政治犯についての抗議行動でも、いずれかの人間の塔チームが必ず現れる。

人間の塔の広がりに関して、カタルーニャ・アイデンティティを象徴する踊りであるサルダーナ (Martí, 1994) と同様に、人間の塔は、ほんの一部の例を除いては、カタルーニャ域外のスペイン国内には根付かなかった。しかし、国外、すなわちイギリス、チリ、中国、オーストラリアなどには人間の塔チームは設立され<sup>(11)</sup>、その広がりを見せている。

## 2.4. 伝統を可視化する、または伝統を支援する(公共) 団体

ここで扱うテリトリーは特異なので、他のつながりのテリトリーからこの領域を区別することは重要だと筆者は考える。伝統的な祭りのような文化的行事には、何かしらの文化的な関連性があり、多数でないにせよ必ず公共団体が背後にいる。それは、こ

うした団体から発案された可能性があり、また恐らく、文化的行事の維持にとって重要なものである。文化的行事に公共団体が与える具体的な認識や意味は、先に挙げた1番目のつながりのテリトリーに見られるものとは異なる。この認識や意味は、相補的でもあり、時には争いを生むものでもある (Martí, 2017)。

公共団体の種類は非常に多様である。例えばカタルーニャに関して言えば、祭りのような文化的行事の多くは宗教的な表現として理解されるべきで、宗教団体によって生み出され、また、維持されてきた。したがって、その特徴から、一つのつながりのテリトリーとして捉えられるだろう。例えばこのテリトリーにおいて、主たる価値である宗教性が祭りという形あるものを可能にすると推測できる。ここで言う価値(宗教的価値)とは、文化的行事の特徴である他のテリトリーでは衰えたり、消えてしまう可能性があるものである。聖週間【訳注4：キリストの受難を再現する復活祭までの1週間】の宗教行列は、カトリック信仰に基づく感情を引き起こそうと意図する教会によって生み出されたものだが、他のテリトリーにおいては集団としての感情、カタルーニャのような「国」を想う感情、伝統への崇拜に関連付けられ、場合によっては単なる見世物、つまり美的なもの、あるいは遊びとして理解される。

人間の塔の場合は宗教団体と何ら関係性はないが、その代りに、この200年間のカタルーニャ市民社会で起こったアソシエーションイズム(連帯主義)<sup>(12)</sup>がもつ重要性なしには、理解しえないだろう。カタルーニャでは、文化的、経済的、政治的、スポーツなどの目的で非常に多くのアソシエーションが形成され、発展していったが、人間の塔が新しく町に導入されたり、普及していった事実は、連帯感を基にした社会を設計する過程でカタルーニャが通ってきた経験に起因している<sup>(13)</sup>。人間の塔が連帯感と密接に関わっている証である。

さて、このつながりのテリトリーでは、公共団体として力をもつマスコミの存在を強調しておかなければならない。現在のマスコミは、無形文化遺産の維持と流布に関して、重要な役割を果たしているだろう。カタルーニャにおける人間の塔という現象は、数十年前にラジオやテレビが果たしていた重要な役割がなければ、現在は違ったものとなっていた可能

性がある。K.ウッドワードは21世紀初めにはテレビとインターネットがスポーツに関する最も印象的な変革を担ったと語っている (Woodward, 2009, p.136) が、そのことは人間の塔の場合にも当てはまるだろう。特に1991年以降、カタルーニャのテレビは伝統行事に興味を持ち始め (Bargalló, 2001, p.31, p.72)、現在のような伝統の大衆化に大きく貢献した。伝統文化のテレビ放送を担当するのはスポーツ部署であって (Bargalló, 2001, p.72)、伝統文化や民俗文化の番組を制作する部署ではないことは興味深く、言及に値するだろう。

## 2.5. 伝統の研究者

そして最後に考慮しなければならないテリトリーは、伝統の研究者についてである。このテリトリーでは、公共団体のテリトリーと併せて、文化遺産に関して「いかに考え、語り、記述するか」の方法が生まれている。それは、L.スミスが提唱した「正統化された文化遺産に関する言説 (authorized heritage discourse)」(Smith, 2006, p.11) のことである。

我々が、あらゆる無形文化遺産の問題系にも目を向けようとするれば、このテリトリーを考慮に入れる必要があるだろう。というのも、伝統の研究者による言動や行動が、前述1から4のつながりのテリトリー全てに影響を及ぼすという理由のみならず、再帰的实践 (P.ブルデュー&L.ヴァカン 1994) をこうした研究に援用できることに関心を寄せるべきであると考えからである【訳注5：再帰的实践という観点からは、それまでの理論や研究方法の再検討が促されるからである】。さらに、伝統の研究者について触れる時、我々は知識という枠組みの中でだけではなく、しばしば政治の世界の中でも行動しているということに注意を払わなくてはならない。人間の塔が2010年にUNESCOの世界無形文化遺産に登録されたことは本論文の冒頭で述べたが、それはまさに研究者と制度的な政治との協働によって獲得されたもののなのである。

カタルーニャで民俗への学術的な関心が高まる過程で、人間の塔は既に注目の的であった。例えば、A.インサンセール (Antoni Insenser) は1904年に人間の塔の伝統的な地域の一つであるパナデスの踊りについて、論文を発表した。そこには既に、人間の塔に関する記述が見られる。20世紀前葉における

人間の塔に関する出版物は、常に歴史研究家または民俗研究者によって書かれたものであった<sup>(14)</sup>。

人間の塔に関して出版された最初の研究は1934年のもので、最も多くの作品を残したカタルーニャ人民俗研究者であるJ.アマードス (Amades) 著の『バイスの人間の塔チーム (Els Xiquets de Valls)』という出版物である。その数カ月後 (同年)、フランセスク・ブラシ (Francesc Blasi) によって『バイスのチームが建てる人間の塔 (Els castells dels Xiquets de Valls)』という本が出版された。この2冊は人間の塔を深く知る上で避けては通れないものである。しかし、この2つの例外の他には、人間の塔に関する出版物は1980年代までほとんど出版されなかった<sup>(15)</sup>。特に1990年代以降になると、人間の塔への人々の関心の高まりが研究者の興味をそそり、その結果、この20年間で多くの出版物を目にするようになった。これらの研究の多くは人間の塔の関係者によって書かれたもので、したがって、人間の塔に直接かかわった経験からの視点が見て取れる<sup>(16)</sup>。また、博士論文も書かれた。例えば、ジャウマ・ルセット (Jaume Roset) は医学的な観点、具体的には身体に関する人間の塔という実践に含まれる影響をテーマにした「人間の塔メンバーに関する生理学的なアプローチ (Aproximació a la fisiologia del casteller<sup>(17)</sup>)」という研究論文を2000年に発表した<sup>(18)</sup>。歴史学の領域では、A.サルバリョ・サルバド (Alexandre Cervelló Salvadó) がフランコ政権時代の人間の塔に関する研究を行い、『フランコ政権時代初期のバイスの人間の塔チーム (1939～1960年)』を2014年に博士論文として発表し、岩瀬裕子が修士論文『「人間の塔」の「歴史」の再解釈：「衰退期」に注目して』<sup>(19)</sup>を2015年に提出した。

このような研究者からの人間の塔への関心は、2011年から毎年開催されているシンポジウムからも見て取ることができる。そこでは人間の塔に関係するあらゆる分野に関して専門家が議論を交わすのだが、これまで技術的な問題、歴史の問題、経済的な問題、政治的な問題、普及および広がりに関する問題などがテーマとなった。

## 3. 人間の塔における身体と感情

人間の塔では多くの異なる要素が介入してくるの

で、人間の塔が建てられる契機を、G.ドゥルーズとF.ガタリが提唱するアッサンブラージュ（寄せ集め）として捉えることができるだろう。

アッサンブラージュ論で最も重要なことは、「身体やモノや社会組織ではなく、感情の流れから個々の身体や複数の身体集合の中に生まれ出る、行動、相互作用、気持ち、欲望といった能力なのである」（Fox y Alldred, 2015, p.402）。この感情の流れを介して人間の塔では、それぞれの役目を担い塔の一部となる人々は、各自の個人性を失い、一つの身体を形成する。すなわち、塔という一つの身体になるのだ。

人類学者のD.ヴァイグは次のように言っている。「人間の塔における身体性は、特に階下に位置する場合にほぼ失われていると考察できるだろう。（中略）他方で、メンバーの身体は単なる参加なのではなく、まさに文字通りの身体結合である。それは、感情や親密性や経験を前面に出しながら行われているのだ」（Weig, 2015, p.441）。つまり人間の塔では、個々人が所有する身体に限界が消えてしまうというのだ。ここでは、我々の身体が身体を包んでいる皮膚を超えて拡大しているという、身体一般についてのD.ハラウェイの言及（Haraway, 1991, p.178）が、はっきりと理解できるのである。

人間の塔で最初に注目すべきは、塔を成す多様な身体の間で起こる接触である。日常生活では絶対にありえないような接触が起こる時でもある。そこには過剰ともいえるような接触もある。カタルーニャの社会では、人々の接触はあまり肯定的に受け止められない傾向がある。挨拶や恋人同士の役割に関係している決められた接触のあり方に従う場合などを除いて、日常的な相互作用の場面においては、身体同士はほとんど接触していないと言えるだろう。しかし、人間の塔では日常とは全く異なる身体接触が多々あり、それは数十年前から始まる女性の参入以降も変わっていない。塔の土台であるピーニャをつくる人々は、隙間がないように密集しなければならない。そこでは、しっかりした塔が建つことを担保するために、土台部分は一寸の隙間もなく身体が互いに密着している。上層階（柱となるトロンク）では、個人はお互いに腕かシャツの袖を強くつかみ合わなければならないので、一つの身体が他の身体とつながるのではなく、個々の身体性は、身体に通って

る縦横の力のベクトルの中に消えてしまうということができる。上層階をつくるメンバーは、臆することなく他のメンバーの身体を触り、抱き付き、踏みつけ、押しながら、手や腕や足を使って上に登らなければならない。これは、人間の塔メンバーが最初に学ぶべきことである。

このように人間の塔の活動において、身体に関して守るべき規則の優先順位に変更が起こる。例えば、塔の決まったポイントでは塔を堅固なものにするため、上層階に位置する人をサポートする人がいるが、その人は、上にいる人がたとえ男性であつても女性であつても、上の人の臀部を手のひらで押し返さなければならない。私が人間の塔の練習時にフィールドワークした時にも、塔の土台であるピーニャをやってみないかと言われたことがあったが、その時私は若い女性の臀部に手で触れなければならなかった。私は控えめに手を置き、そういう行為に少し違和感を感じた。するとチームの指導的立場のメンバーが私のところに来て余計な考えは捨てるように言った。「こういう風にやるんだ」と言いながら、その女性の臀部にぴったり手のひらを接触させた。

更に、人間の塔はしばしば夏という季節に行われることを意識すると、汗はかくし、お互いがくっついたときには臭いも強く感じるだろう。人間の塔の世界では、「人間の塔の成功は太陽、汗、足の悪臭とともに成される」<sup>(20)</sup>と言われている。身体と身体、身体と汗、身体と臭いの接触は、人間の塔というアッサンブラージュをつくり上げる一連の流れの一部なのである。

しかしながら、人間の塔をつくるアッサンブラージュにとって最も重要な流れは、感情を繋ぎ止めるような音をもつ関係性による「音のマグマ」である。このマグマは、（特に閉じられた空間において）人が集結している群衆の喧騒、（重要なコンクールが行われている場所の）場内アナウンス、チームリーダーの指示や掛け声、アンチャネータ【訳注6：塔の一番上に上り、塔の完成を意味する空に投げキスするように手を挙げる役割を担うポジション。通常は子供が担当する】が人間の塔が建てられた合図を行ったときに起こる拍手、塔がきちんと解体されたときの拍手、塔の成功を喜ぶ声などによって成るが、特に人間の塔の実演に常に同伴する音楽隊の存在は大きい。私たちは音楽を、美的基準に基づいてつく



られ感じられた音の流れとして理解するが、こうした見方を超えた機能、すなわち私たちに影響を及ぼす音の流れとして捉えるなら、情緒的な雰囲気<sup>(21)</sup>がつくられ、人間の塔が感情を伴ってできあがる過程において、重要な役割を果たすものとして考えることができるだろう。

感情という構成要素は人間の塔の実践において、チームのメンバー間のみならず、塔が建てられるのを固唾をのんで集中して見つめている観衆の間でも、常に重要な役割を果たす。音楽は感情の盛り上がりを生むためにあるといっても過言ではない。一般的に、19世紀中葉から、グラヤー (gralla) と呼ばれるオーボエの一種である楽器と太鼓で構成される音楽隊は人間の塔チームの一員だった (Ayats y Gayete, 2011, p.58)。人間の塔を建てるとき、演奏者は塔をつくるメンバーを導く目的で、決まった楽音で塔ができあがる過程を伴奏する。塔が建つポイントとなる瞬間に準じるよう、音楽は5つの部分から構成されるが、それらは、「始まり」、「塔の建設 (上り)」、「アンチャネータが手を挙げて塔の完成を表す瞬間」、「塔の解体 (下り)」、「実演の終了」である。これらの楽音は、それぞれのグループの特徴となるような細かい違いはあるものの、チーム間で大変似通っている。人間の塔の実演では通常、最初と最後にそこに参加しているチーム全てが同時に、それぞれ一本の柱を建てる。このとき各音楽隊は自分たちの塔を伴奏しているのだけれども、同時に興味深い不協和音ともなっている。

見世物として考えられる文化的行事全てに言えることだが、技術的な知識があり、人間の塔の専門用語を知り尽くし、どのチームが今季は優れているかの情報を知っているようなスペシャリストは、観衆の中にほんの少ししかいない。だから大半の観衆は印象主義者と呼べるような人々なので、先述のようなスペシャリストにはなりえず、人間の塔を観て感動するだけである。彼らは人間の塔の実演の過程にあまり意識的ではなく、塔にまつわる様々な決まりをよく知ることなく、塔の実演を見て楽しむだけである。音楽に関しても、ほとんどの聴衆は楽音の決まりを意識することはないが、音楽の影響力は感じている。人間の塔の実演を見た人は誰でも、同じ曲を人間の塔の実演の場以外で聞くととき (例えばラジオから聞くなど)、身体に何らかの影響を感じるだ

ろう。つまり、音楽は、人間の塔を目の前にした時にしか得られない独特の感情を全て、その人に運んでくると捉えられるのである。

「情動論的転回 (affective turn)」以降、特に、言説やイデオロギー的な分析といった、表象されたものに着目する考え方を超えなければいけないだろう (Blackman y Venn, 2010, p. 9)。例えば音楽の場合、その意味の観点のみならず、情動の観点についても考慮しなければならないことになる。音楽は身体から離れたものとして感じられるものではなく、感情を通して身体と親密に関わりをもつものであるので、このことを人間の塔のケースに直接応用することができるだろう。すなわち、次のようになる。人間の塔の実演を観ている観衆のほとんどは音楽を聞いているが、敢えて「聴いて」いるわけではない。奏者がいることすら気にかけていない可能性もある。人間の塔の実演を見つめるほとんどの人々にとって、音楽は、彼らの身体に影響を及ぼす音の世界を作りだしているが、音という記号は通常、気づかれていない。したがって、音楽の役割の重要性は認識 (意味) レベルのものではなく、感情のレベルのものであると言える。

ここで感情に着目してみよう (図1)。感情が実演の中でどのように生成されるのかについてのパターンを証明することは、それほど難しいことではない。まず、塔を建てようとする広場などの公の空間で、人間の塔のメンバーが準備をしようとしているその時を (グラフ上の)「0 (ゼロ)」と捉えられるだろう。それは、広場のどこかに自分たちのバックやリュックを置き、そこで着てきた服から「白色のズボンにシャツ、頭にバンダナ」というユニフォームに着替えるときである。そこにいる観衆が着目し始めるのは、メンバー同士が助け合いながら腰巻を身に着ける時である。これは私が既に言及したように一つの儀礼と捉えられる行為である<sup>(22)</sup>。しばらくして準備が整うと、塔の土台部分を作り始める。この行為は常にチームの一番トップにあたるリーダーの指示のもとにつくられる。頃合いを見計らって、2階部分をつくるために土台の上に人が乗り始める。この時観衆はリラックスし、あまり集中せずに塔の様子を見ているが、視線はつくられつつある塔に向けられ始める。上層階がつくられ始めると、ある時点で音楽隊の甲高い音が突如として鳴る。音



楽の鳴り始めは、観衆にとって、演奏という行為に導かれるように感情的にぐいぐい引きつけられる感覚を覚え始める合図を示唆している。人々がまだ集中していなかったり、会話し続けていたりしていても、この時には行動が一変し、自分から静かにする雰囲気が出てくる（いつも起こるわけではないが、そういう雰囲気が求められている）<sup>(23)</sup>。この状況からも分かる通り、メンバーが静寂と集中を必要とし、視線は塔を建てる過程に向けられる。一階一階積上がるにしたがって、感情も高まっていく。テンションが最も高まるクライマックスは、アンチャネータが塔のてっぺんに到達し、皆に向かって投げキスの挨拶をしたときである。

一旦上がった観衆のテンションは、塔が徐々に解体されていく間に下がっていく。非常に高い塔が建ったときには、解体し始めの瞬間にもテンションの高まりは維持される。人間による建物を解体するという行為は、技術的な視点からは建てる行為と同様に重要であるが、あまり観衆の注目は引かない。難しい塔を建てれば建てるほど高く上がったテンションは、拍手の弱まりと共に解かれていく。しかし、途中で塔が崩れた場合、感動の瞬間が生まれる。その時視線は、崩落した後に塔の土台部分にひっくり返って横たわっている身体が集まりに向けられる。そこでまさに、怪我人が出ないように崩落の衝撃を和らげるという土台の機能の一つが確認できるのである。

人間の塔という文化的行事において、感情のフローは絶え間なく続くものである。人間の塔のチームと観衆によってつくられるこのアッサンブラージュを介して流れる感情は多様である。こうした感情を挙げてみると、最上階に位置する子供たちがこれから上ろうとする時の、子供たちの家族が感じる恐怖、塔が建って震え始めた時に感じる恐怖、上に乗っている者の体重を我慢するメンバーの顔に浮かぶ表情からうかがい知れる苦しみ、アンチャネータが目的を達成するために頂点に達して、急いで手を挙げるときに見せる焦り、塔が建った時に観衆が感じる幸福感や喜び、非常に難しい塔を完全に成功させたときにチーム全体で感じる誇り、その時の観衆からの称賛、素晴らしいパフォーマンスを終えた後にライバルチームが感じるだろう羨み、塔が崩落し怪我人がいるかもしれない時の心配やフラストレー

ション、そして塔が建たなかったときの結果として出てくる落胆や苛立ち、などである。これらは、直接・間接的な参加者の表情から見て取れる様々な感情の総体なのである。そこに、人間の塔という実践から生まれる熱意や情熱を加えるべきであろう。

人間の塔の実践には、相応しくないとされる感情的な態度や表現もある。塔の崩落に対して笑ったり、ライバルチームに対して嘲笑または蔑むような仕草をしようと思う者はいないのだ。実際に私がアッサンブラージュの一つとなり、恥ずかしいと思った具体例を挙げてみよう。私が見ていた塔の中で崩落したものが一つあり、メンバーの2人が、救急隊が来るまで痛みを耐えていた。その時私は様子を写真に収めようとしたが、他のメンバーが私を見て、やめるよう忠告してきた。つまり、私はあの状況を写真に撮るべきではなかったのだ。すぐにそれを理解しカメラをしまったが、私はそこで恥ずかしさを感じた。

以上のことを考慮すると、先に挙げた様々な感情は、色々な種類のスポーツの実践でも見られるものだが、人間の塔で生まれる感情のフローは特別なものとして捉えられる。練習、こなすべき作業、努力、計画、協調、予測されるリスク、競技性、観衆（つまり、観衆がいることを想定している）、そして身体接触が起こる場で個々の身体によって経験される全てなのである。この身体接触は、身体の境界が人間の塔という集合的身体となるために消されるよう機能している。

#### 4. 伝統と変化

人間の塔のメンバーは、他の文化的行事と同様、常に社会的変化の過程に順応してきた。この伝統的な文化的行事は、18世紀終わりと20世紀初めに消滅しかけた。こうした危機的状況はその後徐々に回復していき、1960年代には、人間の塔を昔から行っている地域を超えて広がり始め、1980年代、つまりスペインが民主主義を再び勝ち取った後に、人間の塔のブームが起こった。既に述べたつながりのテリトリーを使って1960年代までと現在を比べるとすると、次のことが見えてくる（表2）。

異なるつながりのテリトリーは、相互に作用する中で、時間を経て展開しながら、無形文化遺産とし

て理解される文化的行事（ここでは人間の塔）を創造あるいはその存在を可能にし、維持・利用し、または、それに意味を与えるものである。人間の塔は、異なるつながりのテリトリーの中で実際に行われるものであると同時に、それ自身の変化も促している。V.T.ハフスティンが述べるように、「文化遺産は、遺産としてデザインされた場所や慣習を客体化や再コンテクスト化しながら人とモノおよび人同士の関係性を記憶している」（Hafstein, 2012, p.508）。つまり、文化遺産は変化を誘発するもので、人や、その人自身の習慣との関係性を変え、また、彼ら自身がどのように感じるかをも変えるものであ

る（Hafstein, 2012, p.511）。このことを考慮すると、人間の塔はカタルーニャという範囲に限られたものであるだけでなく、その独自性と見世物的な性質から、国際的にも受け入れられる文化的実践であり、カタルーニャの域外でも研究者やスペシャリストの興味・関心を引くものなのである。

## 5. おわりに

最後に人間科学的な共同研究プロジェクトに参加することの成果について触れたい。筆者にとって人間の塔をテーマに、一見かなり離れていると見られ

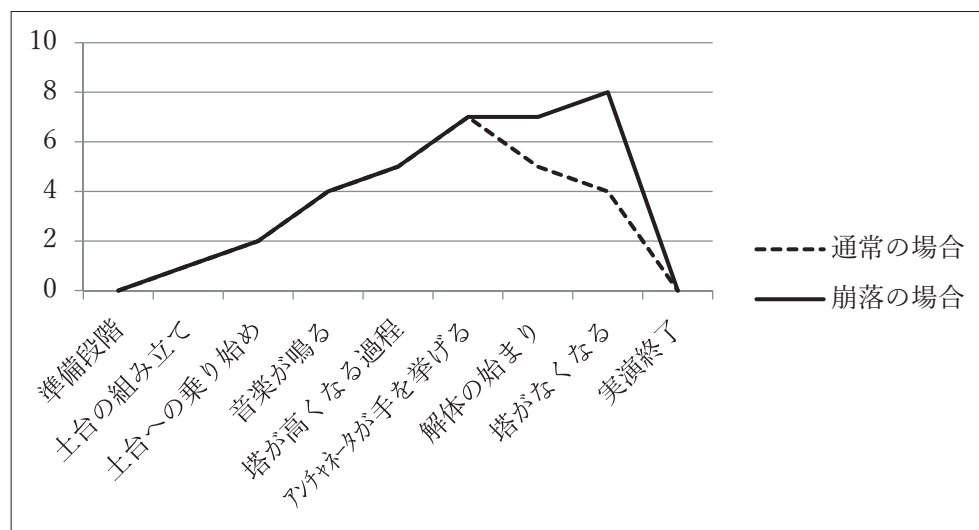


図1：感情の生成過程とその度合い（参与観察を基に筆者作成）

表2：つながりのテリトリーに関する歴史的な比較

つながりの領域等	年代	1960年代まで	現在
塔について		伝統的な暦に従って実演	一年中活動
		伝統的という記号として作用	より高く多様な塔を建てる 伝統という記号としての要素の喪失
		限られた地域のみでの行事	カタルーニャ全土への広がり
伝統の担い手		男性のみ	男性も女性も参加
		労働者階級	社会階層は限定されず、異なる階層が混在
		職業的（プロ）	アマチュア的だが、より優れた技術力が必要
		人間の塔チームの増加は緩やか	チームの急増
伝統を担うコミュニティ		主に農村地域	農村地域と都市部（両方）
想像の共同体		主に地方（伝統が実践される地域）	カタルーニャ全体
公共団体		アソシエーションイズム（連帯的）	アソシエーションイズム（連帯的） 行政、マスメディア
研究者		研究の欠如	研究者による関心 出版物 学術会議 大学レベルのプログラム

る領域を超えての学際的な議論は新鮮に思え、それぞれが既に自文化として捉えている領域から発せられる意見は大変興味深く参考になった。そこで筆者は、人間の塔に関する自身のフィールドワークを基にした研究発表が、質疑応答や意見交換の場を経て、文化人類学研究者だけに向けて発せられたのではないことを痛感し、それまで考えたことがなかった観点から、自らの研究を再考する機会を得た。例えば人間の塔に関する筆者の研究において、感情とは非常に重要な要素である。人間の塔の現象の中で見られる危険に対する恐怖や怖れという感情が、建築学や安全工学の立場からあまり重要視されていなかったり、二次的なものとして扱われるわけではないことを筆者は共同研究を通じて確信できた。筆者も他分野から影響を受けている。そこにはそれまでの他分野に対する固定観念あるいは無知さを解消するような、率直な議論があったと理解している。

具体的な関心同様、共感がその根本的な特徴の一つをつくるという変わった事実のために、基本的に文化人類学は領域横断的なアプローチを行うのかなり適した分野の一つである。このことは文化人類学で研究されるコミュニティ同様、他の学問分野の専門家と行う共同研究にも関係していることは明らかである。こうした学問的特徴から、文化人類学研究者は異なる領域の要あるいはファシリテーターとしての役割を担うことができるのではないかと考えた。

筆者は、生物学者でありヒューマニストでもあるE.O.ウィルンが提唱する「コンシリエンス (Consilience)」【訳注6：知の統合とも言い換えられる、ウィルソンが提唱する概念】の理論を個人的に重要だと考えている。コンシリエンスとは、学問分野によって異なる伝統をもつ科学的実践に存在する深い溝を埋めることを目的として、自然科学、人文学、芸術から得られた知識を繋ぎ合わせる意志のことである (Wilson 1999)。したがって我々の共同研究は、単に人文学の専門家が集められただけではないので、どのようにコンシリアスに到達するよう協働してきたかの一つの好例を示すことができたのではないかと自負している。

## 注

- (1) 本研究は、人間総合研究センター研究プロジェクト「パフォーマンスを通した「感動」の探求：人間の塔 (Castells) の多角的なエスノグラフィ構築の試み」(Cプロ) の成果の一部である。
- (2) 人間の塔の実演に関する最も古い記述は、アルクペール (Alcover) で1789年に書かれたものである (Bargalló, 2001, p. 18)。
- (3) 人間の塔をつくるグループの名称がコージャ (colla) で、その複数形はコージャス (colles) である。カタルーニャ語でコージャ (colla) は人間の集団一般を表す言葉である。
- (4) <http://www.cccc.cat/les-colles-castelleres> (2018年10月8日)
- (5) 例えば「フォーラとマニージャスを伴う3人の10段」という最も難しい塔の場合、630人を必要とするが、その内500人が最下層の構成員なのだ (Bargalló, 2001, p. 60)。
- (6) <http://www.cccc.cat/les-colles-castelleres> (2019年12月17日)
- (7) 人間の塔を表すこの特徴は、J.アンセルム・クラベの詩「バイスの人間の塔チーム」(1867年) から用いられている。
- (8) 人間の塔は歴史上、現在までに3人の死亡が確認されていて、全て犠牲者は子供である。最初の死亡者は1871年に出ている。最近ではヘルメットやマウスピースといったプロテクションの着用が義務付けられている (Bertran, 2011, p. 44)。
- (9) 人間の塔への女性の参加については、AADD (2014) を参照されたい。
- (10) 例外的で時も限定されるが、時々女性のみによってつくられた塔もあるようだ。(参考：[https://www.ara.cat/castells/per-que-diem-si-castell-dones\\_0\\_2087791400.html](https://www.ara.cat/castells/per-que-diem-si-castell-dones_0_2087791400.html)) (2018年9月12日)
- (11) 最近では、イギリス (Castellers de London)、チリ (Castellers de Lo Prado)、中国 (Xiquets de Hangzhou)、オーストラリア (los Kangaroos - Castellers de Sydney) のように海外で人間の塔チームが設立されている。しかし今のところ特殊なケースであり、背景が異なるため活動の仕方も異なる。
- (12) カタルーニャのアソシエーションイズムに関しては、メストラを参照されたい (Mestre, 1998, p.72)。



- (13) カタルーニャ南部の、人口900人ほどの小さな町のチーム「ブリバイス・ダ・クルムデーリャ (Brivalls de Cormudella)」のケースは興味深い。このチームは独裁者フランコの死後すぐのアソシエーションニズムが隆盛する1976年に設立された。クルムデーリャ・ダ・ムンサント (Cornudella del Montsant) に人間の塔チームを導入するというアイデアは、その町に何か積極的な意味あるものをつくりたいと願う若者グループから始まった。それまでその地域には存在しなかった慣習であるにもかかわらず、人間の塔チームを結成する決定をしたのだ。人間の塔のチームを運営・維持するのはそれほど容易なことではないのだが、クルムデーリャのような人口の少ない町では尚更のことである。1985年にチームは一度解散するが、2012年には復活し、現在でもそのまま維持されている。チームは90人で構成されているので、町の総人口の10%が人間の塔チームの成員であることがわかる。  
(<http://www.ccma.cat/324/cornudella-de-montsant-el-poble-mes-petit-amb-collacastellera/noticia/2870878/>) (2018年9月12日)
- (14) その多くはアマーダスの文献から確認した (Amades, 1934, pp. 74-76)。
- (15) 少ない文献の中ではあるが、E.ミロ (Miró 1961) とJ.モラント (Morant 1967) 著の出版物が挙げられる。
- (16) 例えば人間の塔に関する出版物は、コセタニア出版 (editorial Cossetània) のものを参照されたい。
- (17) 出版物としては次のタイトルになっている。「塔を建てる者の生き残りマニュアル：人間の塔に関するサービスの科学 (Manual de supervivència del casteller. La ciència al servei de les torres humanes)」。
- (18) <https://www.educacion.gob.es/teseo/mostrarSeleccion.do> (2018年9月12日)
- (19) [https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=22916&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=22916&item_no=1&page_id=13&block_id=21) (2018年9月12日)
- (20) [https://www.ara.cat/societat/castells-no-coneixen-horaris-europeus\\_0\\_1422457786.html](https://www.ara.cat/societat/castells-no-coneixen-horaris-europeus_0_1422457786.html) (2018年9月12日)
- (21) 「情緒的な雰囲気 (affective atmospheres)」という概念に関しては、B.アンダーソンを参照されたい (Anderson, 2009)。
- (22) 人間の塔のメンバーは、通常、これから塔を建てるようとするその広場で、人前でシャツやズボンを着替えるが、誰もそれを気に留めない。しかし、腰巻を身につけようとする時には注目を浴びる。腰巻という伝統的な衣装は現在では日常的には使われないものである。また、身体にぴったり装着してあげなければならないので、介助の人が腰巻の端をもって引っ張っている間に、当人は7メートルの長さの腰巻分、くるくると回りながら、持ってもらっている端まで移動してくる。次のリンクを参考にされたい。[https://www.youtube.com/watch?v=r\\_uwyGmh058](https://www.youtube.com/watch?v=r_uwyGmh058) (2018年9月12日)  
ここでは「儀礼的」という言葉について、腰巻を巻くという行為が衣装という表現方法的な意味をもつからではなく、人間の塔の実演が始まる直前に行われるべき行為だから、儀礼的な感覚を覚える、という意味で用いている。
- (23) 塔が建つ時の完全な静寂については、この数十年で変化が見られる。これは、人間の塔という伝統的な文化的行事が長きにわたってそれが実演される場で維持されてきた慣習であるが、カタルーニャ中に広まることで、この文化コードを必ずしもそこにいる全員が知っているわけではなくなった。それを共有しない地域の人、観光客もいるからだ。静粛さを保つことは、メンバーの集中力を高めるばかりでなく、リーダーの指示を正確に聞き取ったり、音楽隊が奏でる音をしっかり聴いたりする上で、非常に重要なことである。

#### 引用・参考文献

- AADD (2014). *La dona i l'economia en el món casteller: III Simposi Casteller*, Valls: Cossetània.
- Amades i Gelats, Joan (1934). *Els xiquets de Valls*. Barcelona: La Neotípi.
- Anderson, Ben (2009). *Affective atmospheres. Emotion, Space and Society*, 2 (2), 77-81.
- Anderson, Benedict (1983). *Imagined communities*:

- reflections on the origin and spread of nationalism*. London: Verso.
- Ayats, Jaume i Iris Gayete (2011). Las músicas de los castells. VV.AA., *Castells y castellers: Una voluntad colectiva*. Barcelona: Lunweg, 58-73
- Bargalló Valls, Josep (2001). *Un segle de castells*. Valls: Cossetània Edicions.
- Bertran, Jordi (2011). Los castells en Cataluña, de préstamo cultural a patrimonio de la humanidad del siglo XXI. VV.AA., *Castells y castellers: Una voluntad colectiva*. Barcelona: Lunweg, 12-45.
- Blackman, L. i C. Venn (2010). *Affect, Body & Society*. 16/1, 7-28.
- Blasi i Vallespinosa, Francesc (1997/1934). *Els castells dels Xiquets de Valls*. Valls: Cossetània.
- Bourdieu, Pierre & J.D. Wacquant, Loïc (1994/1992). *Per a una sociologia reflexiva*. Barcelona: Herder.
- Cervelló Salvadó, Àlex (2015). *Els Xiquets de Valls durant el primer franquisme (1939 – 1960)*, Valls: Cossetània.
- Deleuze, G. y Guattari, F. (1980). *Mille plateaux*. Paris: Editions de Minuit.
- Fox, N.J. i Alldred, P. (2015). New materialist social inquiry: designs, methods and the research-assemblage. *International Journal of Social Research Methodology*, 18 (4), 399-414.
- Hafstein, Valdimar T. (2012). Cultural Heritag. Bendix, Regina F. i Hasan-Rokem, Galit (eds.), *A Companion to Folklore*. Oxford: Blackwell Publishing, 500-519.
- Haraway, D. (1991). *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*. New York: Routledge.
- Insenser, Antoni (1904). El Penadès. Balls, Dansas y Comparsas Populares. *Revista Musical Catalana*, 6, 117-119 y 12, 252- 257.
- Martí, Josep, (1994). The Sardana as a Socio-cultural Phenomenon in Contemporary Catalonia, *Yearbook for Traditional Music*, 26, 39-46.
- Martí, Josep (1996). Etnicitat, cultura i nacionalisme, *Revista de l' Alguer*, Vol. 7, 27-40.
- Martí, Josep (2017). Patrimoni immaterial: l' esmunyedissa lleugeresa d'una idea, A. Ramis Puig-gròs (ed.), *El patrimoni immaterial Entre la revisió i la descoberta*, Palma de Mallorca: CAGB, 149-166.
- Mestre i Campi, Jesús (director) (1998). *Diccionari d'Història de Catalunya*. Barcelona: Edicions 62.
- Miró, Emili (1967). *Història dels castellers els "Nens del Vendrell"*. Barcelona: Rafael Dalmau.
- Morant, Jordi, (1967). *Història dels castells. Tarragona i les comarques castelleres*. Tarragona: Patronat Municipal de Castells.
- Roset, Jaume (2000). *Manual de supervivència del casteller. La ciència al servei de les torres humanes*. Valls: Cossetània.
- Smith, Laurajane (2006). *The Uses of Heritage*. London: Routledge.
- Weig, Doerte (2015). Sardana and castellers: moving bodies and cultural politics in Catalonia, *Social Anthropology* 23/4, 435–449.
- Wilson, Edward O. (1999). *Consilience: The Unity of Knowledge*. New York: Vintage.
- Woodward, Kath (2009). *Embodied Sporting Practices: Regulating and Regulatory Bodies*. Basingstoke: Palgrave MacMillan.